

つな がる

野外彫刻マップ

The Museum of Modern Art, Kamakura & Hayama



葉山館

2003年の開館以来、一部作品の入れ替えや追加を経て、彫刻20点(①~⑳)が庭園に、壁画2点(㉑・㉒)が建物内に常設されています。

① イサム・ノグチ《こけし》 1951年 万成石



一人の一部が、もう一人へと伸びています。石のまだら模様の中に万成石特有の淡い紅色を見ることができます。

② 《石人》 1966年 セメント



大分県の岩戸山古墳から出土した石の人体像の型を取り、複製したものです。矢を入れた容器を背負う姿は、羽を広げているように見えます。

③ 柳原義達《裸婦 座る》 1956年(1964年以前铸造) ブロンズ



静かな佇まいの座像ですが、左右で異なる肩の高さや、わずかに上がった右足などには動きが感じられます。

④ 木村賢太郎《作品-55》1961年 石



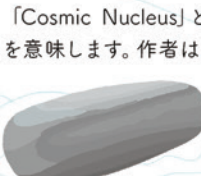
丸みを帯びた単純な形が絡み合うと、具体的な何かを想像させます。

⑤ 湯村光《Stone Work-Stream》 1987年 黒御影石



庭園の木々や葉山の空が映るアフリカ産の黒御影石。破れのような切断面と滑らかな側面を触り比べてみましょう。

⑥ 山口牧生《棒状の石あるいはCosmic Nucleus》 1976年 黒御影石



「Cosmic Nucleus」とは「宇宙の核」を意味します。作者は、自然における最も本質的な形を探求しました。

⑦ 空充秋《揺蕩》1985年 黒御影石



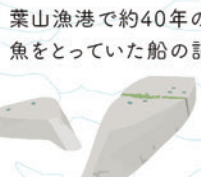
7つの石の凹凸が繰り返し組みあげられねじれて自立する姿は、重たい石でありながらも、水の中でたゆたう柔らかな藻のようです。

⑧ 鈴木昭男《「点音」プレート・葉山(神奈川県立近代美術館 葉山)》 2012年 コンクリート、3点組



耳と足の形が表されたプレートの上に佇んで、あなたの音楽を探してみてください。

⑨ 西雅秋《大地の雌型より》 2003-5年 漁船5艘(コンクリート型抜き)



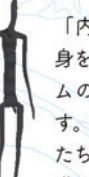
葉山漁港で約40年のあいだ海藻や魚をとっていた船の記憶が、船を型に抜くことで海を望む美術館の庭に残されています。

⑩ 西雅秋《イノセンス・火》1991年 鉄、ブロンズ



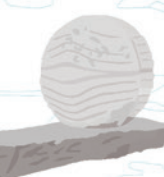
2つの金属はそれぞれ自然の影響を受け、鉄は赤く錆び、ブロンズは青緑に朽ちます。自然の中では異物である人工的な彫刻が、作者の手を離れ姿を変えていきます。

⑪ アントニー・ゴームリー《Insider VII》 1998年 鉄



「インサイダー」とは「内部の人」を意味し、作者自身を型取りしたものからボリュームの60%が削り取られています。虚無感が漂う鉄の人物と私たちの今いる空間や時間に、意識を向けてみましょう。

⑫ 富樫一《ハーモニーII》 1972年 石



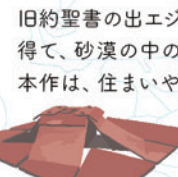
固く重い石の膨らんだ形や、柔らかく波打つ曲線から、分断された球体の「調和」が感じられます。

⑬ 眞板雅文《天地の恵み》 2003年 ブロンズ、鉄、石



竹林の中に隠れる、半分に削がれた竹とそれを囲む割られた安山岩は、自然と人工物の間について思索を促します。静かにとまる蟬に気づきましたか。

⑭ 保田春彦《地平の幕舎》 1993年 鉄



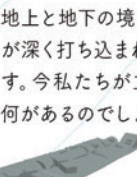
旧約聖書の出エジプト記から着想を得て、砂漠の中のテントをあらわす本作は、住まいや都市の原点としての、人間の営みや都市の歴史を想像させます。

⑮ ホセイン・ゴルバ《愛の泉》 1993-7年(2004年铸造) ブロンズ



イタリアにある彫刻庭園の水飲み場としてつくられました。木材から型を取ったため、側面に木目が見えます。水を飲めば、タイトルの意味がわかるかもしれません。

⑯ 若林奮《地表面の耐久性について》 1975年 鉄



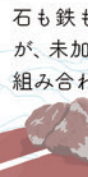
地上と地下の境目である地表面に鉄板が深く打ち込まれ、草地を圧迫しています。今私たちが立つ地面の下には一体何があるのでしょうか。地表面より下の見えない世界は、想像に委ねられています。

⑰ 小田襄《円柱の展開》 1983年 ステンレス・スティール



中央の円柱が上部へ三角形に、下部へは円錐形に広がって展開しています。その形にあわせて、葉山の風景が鏡のような表面に映ります。

⑱ 李禹煥《項》 1985年 鉄、石



石も鉄も自然からとれるものですが、未加工の石と加工された鉄板を組み合わせ、石と鉄、作品が置かれる場と人など、“もの”の関係性を探っています。

⑲ 中島幹夫《軌 09》1966年 石



一見素朴な石ですが、表面には、のみで打ち込まれた細かい質感があります。風が通る中央の孔からのぞく風景や日差しにより、季節や天候とともに作品の表情が変わります。

⑳ 清水九兵衛《BELT》 1978年 アルミニウム、大理石(台座)



冷たく固い金属が薄くのばされることで、柔らかなたわみと軽やかさを感じさせ、葉山の自然環境に調和しています。

㉑ 長谷川路可《名誉と繁栄と祝福の象徴》 1961年 モザイク(石、モルタル、鉄枠)



結婚祝いとしてつくられ、ある屋敷の廊下に飾られていました。杯と月桂樹は「名誉」、ザクロは「子宝」、ウズラは「山の幸」、バラの花は「愛情」を象徴します。

㉒ 田中孝《女の一生》 1957年 油絵具、水彩絵具、砂、墨、パネル



作者の娘が生まれた年に女性の幸福を願って、朱色の背景に白色で描かれました。かつては鶴岡八幡宮境内、旧鎌倉館の喫茶室にありました。

葉山館の建物

2003年開館。白い花崗石を貼り、水平線を強調したシンプルな建物。一色海岸に臨む広い中庭により、緑あふれる三ヶ岡山と青く雄大な相模湾に囲まれた、明るく開放的な空間が広がります。



鎌倉別館

1984年の開館以来、建物の入口正面に立つ柳原義達《犬の唄》をはじめとする8点の現代彫刻を屋外に展示しています。

① 柳原義達《犬の唄》1983年 ブロンズ



タイトルは抵抗の精神を謳うフランスの歌に由来し、姿勢や表情には敗戦後の抑圧に屈しない強さがあらわれています。

② 井上玲子《カゲボウシ》1988年 アルミニウム



滑らかでしなやかな曲線は、開口部に木々や空を閉じ込めながら、上に伸びていきます。

③ 多田美波《時空》 1980年 ステンレス・スティール、結晶化ガラス



磨かれた幾何学的なステンレスはゆがんだ像を映し、移ろう景色をとりこみながら時間の流れとともに変化します。

④ 渡辺豊重《SWING 86-01》 1986年 鉄、塗装、真鍮



曲面と平面の組み合わせや丸みを帯びた形、白・赤・緑の明るい色彩は楽しげで、今にも揺れ動きださそうです。

⑤ 植松奎二《浮くかたちー軸》 1994年 鉄、塗装



下向きの円錐は作者の作品に度々表される形であり、重力などの目に見えない根源的な力を意識させます。

⑥ 湯原和夫《無題》 1982年 ステンレス・スティール、鉄



景色を映すステンレスと錆びた鉄のシンプルな組み合わせが、見る者を虚像の空間へと誘います。

⑦ 本郷新《わだつみのこえ》1950年 ブロンズ



第二次世界大戦に出征して亡くなった学生を追悼し、平和を祈念するためにつくられました。ポーズや表情に注目してみましょう。

⑧ 眞板雅文《静思空間》 1994/2009年 鉄、塗装、石



円錐と階段のような幾何学的な形の組み合わせが、建築物や不思議な世界を思わせます。修復時(2009年)、制作当初は水を張っていた円形の溝に、作者が小石を敷き詰めました。

鎌倉別館の建物

大高正人の設計で1984年に開館。庭園からは室町期の鶴岡八幡宮二十五坊跡が出土しました。正面に張り出した2階部分を特徴とし、深い緑や谷戸、歴史を持つ街並みに溶け込んだ、重厚感のある建物です。

